

向社会性に関する規範意識の形成とその影響

奥山 尚子

(神戸大学大学院経済学研究科 准教授)

1. はじめに

利他性、互酬性（互惠性）、他者に対する信頼といった規範意識はどのように形成されるのだろうか。2011年3月の東日本大震災を契機に利他心の上昇がみられたといわれたが、一時的な変化であったともいわれている。2011年3月の東日本大震災の直後、「被災地の力になりたい」と全国で献血者が急増したものの、発災翌月には例年並みに熱が冷めてしまった格好で、年末には献血血液が不足する地域も出た（読売新聞 2011）。義援金や被災地ボランティアといった支援も、発災から2～3カ月をピークに水準がとどまっている（厚生労働省 2013）。また震災直後には「絆」という言葉が盛んに語られたが、一方で、血縁や地縁の希薄化が続いており、共同体意識や当事者意識の低下が指摘されている。さらには、社会規範に反する逸脱行為の若年化といった社会問題についても、思いやりや共感、助け合い、公共心といった意識の低下によるところも大きいとされている（読売新聞 2007）。

向社会的な規範が寄付や献血、ボランティアなどの利他的行動へのコミットメントを高めたり、逸脱・迷惑行為や暴力犯罪行為等を抑制することは既存研究でも検証されている。しかし、そもそも規範は何によって規定されるのだろうか。また、規範間の違いはあるのだろうか。本稿では、向社会性に関する規範意識の形成要因について検証する。さらに、利他的行動として献血とボランティアを取り上げ、向社会的な規範が与える影響につ

いて考察・検証する。

2. 先行研究

向社会的な規範の形成とその影響について、利他的行動に対する規範からのアプローチでは、互惠的な規範（Gouldner 1960）や自己犠牲の働きを前提とした贈与規範（Leeds 1963）、社会的な責任感や義務感からくる規範（Berkowitz and Daniels 1964）などの規範が指摘されている。しかし、こうしたアプローチでは、それぞれの規範が矛盾する場合があることや、事後的な解釈になりがちであることが指摘されてきた（Darley and Latane 1970）。その後、事態を認知することで規範が形成され、発展し、実際の援助行動に至るまでの規範による意思決定過程のモデルを試みた研究も出てきた（Schwartz and Howard 1981, 1982, 1984）。

近年では、実験的手法により、規範が利他的行動に及ぼす直接的な効果について検証が行われている（Evans and Ferguson 2014; Hill et al. 2012; Krupka and Weber 2009; Wildman and Hollingsworth 2009）。また規範は、子どもの社会化の過程において、家族や友人、年長者、さらには地域の隣人等との関係を通じて内面化されていくものであるとされている（Eisenberg 1992; Mills and Grusec 1989）。子どもの頃の環境や経験が規範を形成し、さらに具体的な社会的活動へのコミットメントにつながっていると考えられる。本稿では、複数の規範意識を対象に、規範の形成

図表-1 記述統計量

	観測数	平均値	標準誤差	最小値	最大値
献血経験の有無	2345	0.617	0.486	0	1
ボランティア活動の有無	2345	0.114	0.318	0	1
利他性（金銭寄付の意思）	2345	0.956	1.085	0	5
他者に対する信頼	2345	3.065	0.917	1	5
正の互酬性（3項目の平均値）	2345	3.832	0.634	1	5
負の互酬性（3項目の平均値）	2345	2.711	0.904	1	5
性別（男性=1）	2345	0.513	0.500	0	1
年齢	2345	45.707	13.967	20	69
婚姻（既婚=1）	2345	0.620	0.485	0	1
学歴	2345	14.319	2.094	9	21
世帯所得	2345	573.902	369.272	50	2000
公務員（公務員=1）	2345	0.035	0.185	0	1
健康状態	2345	3.170	0.941	1	5
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった	2345	0.528	0.499	0	1
小学校入学前、家族の誰かが本を読んでくれた	2345	2.556	1.048	1	4
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした	2345	2.882	0.939	1	4
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた	2345	3.451	0.864	1	4
焼け跡世代	2345	0.076	0.265	0	1
団塊の世代	2345	0.078	0.268	0	1
しらけ世代	2345	0.293	0.455	0	1
バブル世代	2345	0.104	0.305	0	1
氷河期世代	2345	0.287	0.452	0	1
ポスト氷河期世代	2345	0.075	0.264	0	1
ゆとり世代	2345	0.087	0.282	0	1
北海道	2345	0.059	0.236	0	1
東北	2345	0.079	0.269	0	1
関東	2345	0.060	0.237	0	1
京浜（1都3県）	2345	0.211	0.408	0	1
北陸	2345	0.076	0.266	0	1
東海	2345	0.116	0.321	0	1
京阪神	2345	0.158	0.364	0	1
中国	2345	0.069	0.254	0	1
四国	2345	0.047	0.213	0	1
九州	2345	0.124	0.330	0	1

と影響について分析する。

3. データと変数

本稿で使用するデータは、公益財団法人家計経済研究所が実施した「若年層の生活と家計に関する調査」の個票データである。同調査は、若い頃の経験、経済や社会に関する考え、生活行動における好みや考え方などに関する質問項目を含んでおり、世代による価値観や行動様式の特徴や違いを明らかにすることを目的としている。全国に居住する20～69歳の男女を対象に、性別、年代、地域の別による標本割り付けにより無作為抽出を

行い、インターネット調査で実施された。回答依頼数は9,910、有効回答数は3,570で、回答率（回答依頼数に対する有効回答数の割合）は36.0%であった。分析では、使用する変数について欠値処理したデータを使用した。その結果、2,345名となり、記述統計は図表-1のとおりである。

(1) 向社会性に関する規範意識

本稿では、向社会性に関する規範意識について、利他性、他者に対する信頼、互酬性の3つの規範意識に着目する。それぞれについて、既存調査に準拠して質問している。

利他性については、寄付の意思に関する質問回

答を用いた。世帯一人あたり所得の何%を慈善団体に寄付するかという問いに対して、「最大1%まで」「最大2%まで」「最大5%まで」「最大10%まで」「最大11%以上」「寄付をしない」の中から回答を得た。

他者に対する信頼は、「一般的に人は信用できる」という問いに対して「当てはまる」から「当てはまらない」までの5段階で尋ねている。

互酬性については、正の互酬性 (positive reciprocity) と負の互酬性 (negative reciprocity) に関する調査回答を用いた。互酬性に関する調査項目はDohmen et al. (2009) に従っている。正の互酬性は互惠・互助に関する考えとして、「頼みごとを聞いてもらえたらお返しする」「以前親切にしてくれた人には労を厭わず手助けをする」「以前私に親切にしてくれた人は身銭を切っても助けるつもりだ」という問いに対して、「当てはまる」から「当てはまらない」までの5段階で尋ねている。分析では、個人ごとの3項目の平均値を使用した。負の互酬性は報復に関する考えとして、「ひどく不当な扱いを受けたら、どんな犠牲を払ってでも復讐する」「誰かに苦境に追いやられたら、その人に同じことをする」「誰かが私の機嫌を損ねたら、私もやり返す」という問いに対して、「当てはまる」から「当てはまらない」までの5段階で尋ねている。分析では、個人ごとの3項目の平均値を使用した。

(2) アーキテクチャ (物理的な構造)

向社会性に関する規範意識の形成要素として、アーキテクチャ (物理的な構造) として、地蔵を考える。子どもの頃に近所や登下校の道端にお地蔵様があったかどうかについての質問を用いた。地蔵は、仏教の信仰対象である菩薩の一尊で、路傍や辻に置かれていることが多い。病苦も信仰により現世の幸福に導くとして、信仰の有り難さを信ずる者は救われるとされている。子どもの守り神として信仰され、子どもや水子の供養でも地蔵信仰を集めている (大島 1992; 渡 2011)。生活の中での身近にある信仰環境は、他界観念とも関連して、社会性の発達や形成に影響を与えられ、規範意識を内在化する機会として機能する

と考えられる。

(3) 子どもの頃の家庭環境

規範意識を内在化させる機会として、子どもの頃の家庭環境や家族とのコミュニケーションを取り上げる。調査では子どもの頃の家庭環境や経験を質問している。本稿では「小学校入学前、家族の誰かがあなたに本を読んでくれた」「小中学生の頃、ゴミ捨て、食器の片づけなど、家事および家業の手伝いをした」「小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた」という問いに対して、「よくあった」から「なかった」までの4段階で尋ねており、その回答を用いた (選択肢には「わからない」も設けており、選択肢の数は5つである)。

親や家族は、社会生活における秩序や道徳観や善悪の基準などを躰けるエージェントとして機能し、彼らとの関係性は規律や規範に対する意識を醸成する機会を生むと考えられる。

(4) 世代区分

規範意識を共有する範囲を識別するために、世代の効果をみる。世代は、時代精神の特徴やその時代における具体的な経験内容の特性などを反映していると考えられる。時代ごとの社会的、経済的、文化的特徴によって規範形成や行動基準に違いがあるのかどうかを検証する。世代区分として、「焼け跡世代」(1935～46年生まれ)「団塊の世代」(1947～49年生まれ)「しらけ世代」(1950～64年生まれ)「バブル世代」(1965～69年生まれ)「氷河期世代」(1970～82年生まれ)「ゆとり世代」(1987年以降生まれ)を用いる (ただし、第5節と第6節における回帰分析では、「焼け跡世代」に該当するサンプルは含まれていなかった)。

4. 世代別にみる向社会性に関する規範意識

規範意識の形成要因と考えるアーキテクチャ (物理的な構造) としての地蔵と子どもの頃の家庭環境について、規範との関係を世代別に見た。世代別による地蔵 (の存在と認識) の差は、他のアーキテクチャと比較すると大きくはない (久米

2014)。地蔵の有無別で向社会性に関する規範を見ると、地蔵があったとする人では、なかったとする人に比べて利他性と正の互酬性が高く、利他性ではその傾向はより顕著である(図表-2)。またこれらの傾向は、いずれの世代についても同様である。一方、他者に対する信頼と負の互酬性では、地蔵の有無別で規範の差はあるが、世代によって、地蔵があったとする人のほうがなかったとする人と比べてこれらの規範が必ずしも高いわけではない。地蔵の存在は、向社会性に関する規範の形成にある程度の影響力を持っていたと考えられる。

子どもの頃の家庭環境では、正の互酬性について、世代を通じて差が大きく、若年世代ほどその傾向が顕著である。他者に対する信頼についても差がみられるが、家族が本を読んでくれた経験については、若年世代において経験の有無による違いが大きく、家業や家事の手伝いや家族そろっての夕食といった経験については、高齢世代ほど経験の有無による違いが大きい(図表-3、図表-4、図表-5)。ライフスタイルや家族構成、家庭内の役割分担が時代とともに変化するにつれ、子どもの頃の家庭における生活習慣や経験も変わってくると考えられる。世代と家庭環境の別による規範の違いは、こうしたことを反映しているのかもしれない。いずれにせよ、子どもの頃の家庭環境は、規範意識を内在化させる機会となっていた可能性が考えられる。

5. 向社会性に関する規範意識の形成要因

向社会性に関する規範意識の形成要因について、基本属性や世代、地域をコントロールしたうえで回帰分析を行う。

$$\text{norm}_i = \alpha_i + \varphi X_i + \beta \text{Architecture}_i + \delta \text{Child}_i + \theta \text{Generation}_i + r_i + \varepsilon_i \quad (1)$$

norm_i は向社会性に関する規範意識(利他性、他者に対する信頼、正の互酬性、負の互酬性)である。 X_i は個人属性を示し、性別ダミー、年齢、婚姻ダミー、学歴、世帯所得、公務員ダミーを含

む。 Architecture_i は地蔵の存在(アーキテクチャ)、 Child_i は子どもの頃の家庭環境、 Generation_i は世代区分ダミー、 r_i は回答者の15歳時点の居住地域ダミーである。 α_i は定数項、 ε_i は誤差項である。いずれの規範に関する回帰式もOLSを用いて推定した。

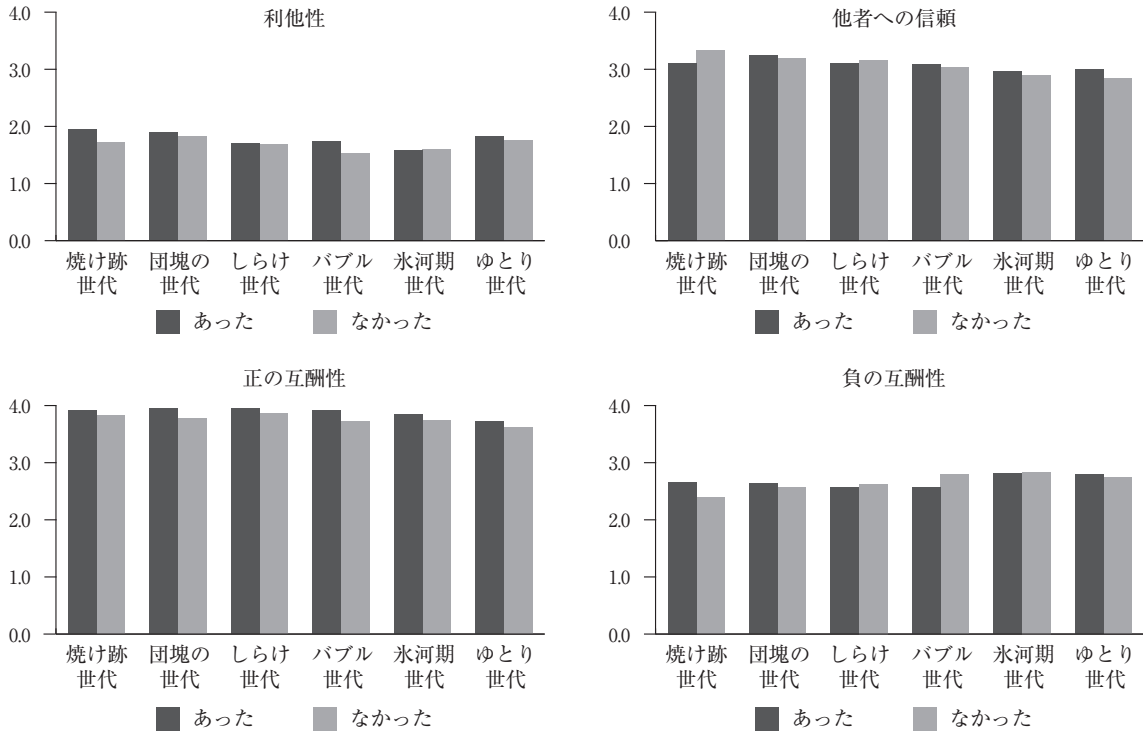
(1) 利他性

推定の結果、利他性について(図表-6)、個人属性のうち年齢のみ回帰式の定式化によらず有意であり、年齢が高いほど利他性が高い傾向が示された。世代をコントロールした場合でも、10%水準で有意である。地蔵の存在は正で有意であるが、子どもの頃の家庭環境に関する変数を含めた場合、利他性に対して与える有意な影響は認められない。子どもの頃の家庭環境は、3つの項目のいずれについても正で有意である。家族が本を読んでくれた経験や家事および家業の手伝いについては、推定式の特定化によらず、利他性に対して有意な影響が認められる。世代区分では、しらけ世代とバブル世代について負で有意であり、ポスト氷河期世代と比べて、利他性が低い傾向が示された。

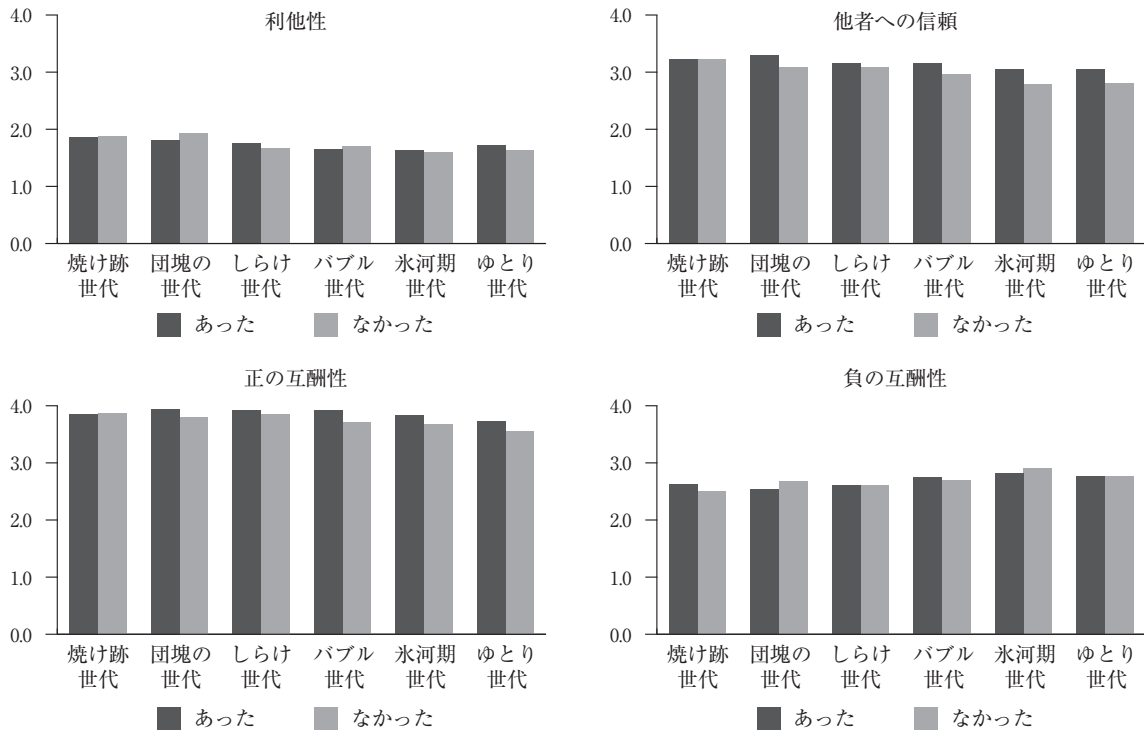
(2) 他者に対する信頼

他者に対する信頼について(図表-7)、個人属性では年齢が有意であり、年齢が高いほど他者に対する信頼が高い傾向が示された。ただし、世代をコントロールした場合には有意ではなくなっている。婚姻ダミーは正に有意であり、非婚者と比べて既婚者のほうが他者に対する信頼が高い傾向が示されたが、一様ではない。さらに、世帯所得は正に有意であり、世帯所得が高いほど他者に対する信頼が高い傾向が示されたが、係数値は非常に小さい。地蔵の存在については、他者に対する信頼に対して与える有意な影響は認められない。子どもの頃の家庭環境は、家族が本を読んでくれた経験と家族そろって夕食を食べた経験について、推定式の特定化によらず、他者に対する信頼に対して有意な影響が認められる。世代区分では、いずれの世代についても有意ではなかった。

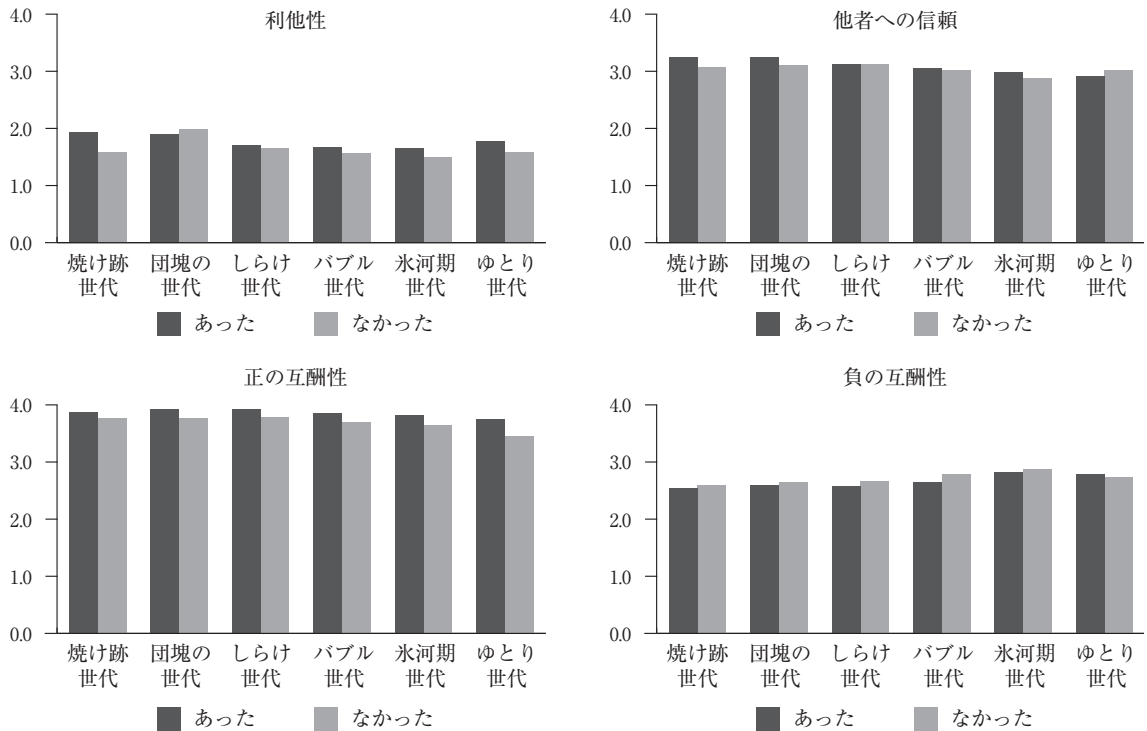
図表-2 世代別の子どもの頃の信仰環境(「近所や登下校の道端にお地藏様があった」)と規範



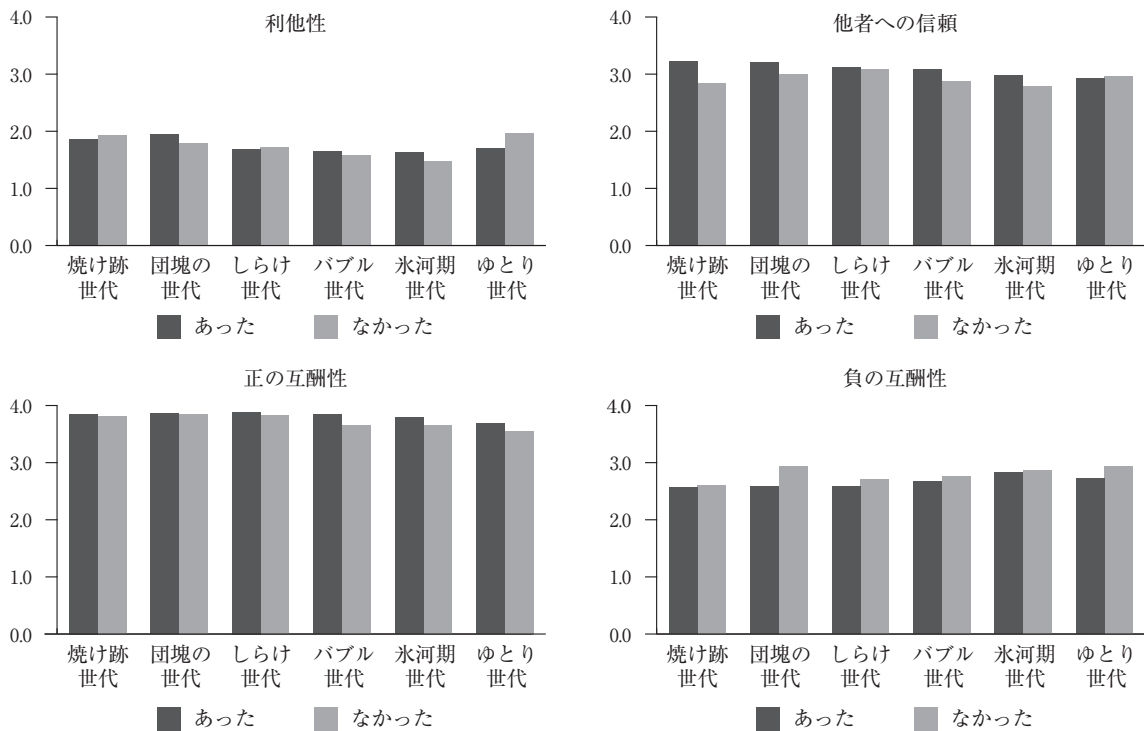
図表-3 世代別の子どもの頃の家庭環境(「小学校入学前、家族の誰かがあなたに本を読んでくれた」)と規範



図表-4 世代別の子どもの頃の家庭環境(「小中学生の頃、ゴミ捨て、食器の片づけなど、家事および家業の手伝いをした」と規範



図表-5 世代別の子どもの頃の家庭環境(「小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた」と規範



図表-6 向社会性に関する規範意識の形成要因(利他性)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
性別 (男性=1)	-0.075 (0.046)	-0.080 * (0.046)	-0.037 (0.046)	-0.042 (0.046)	-0.042 (0.046)
年齢	0.006 *** (0.002)	0.005 *** (0.002)	0.006 *** (0.002)	0.006 *** (0.002)	0.013 * (0.007)
婚姻 (既婚=1)	-0.076 (0.05)	-0.078 (0.049)	-0.071 (0.049)	-0.072 (0.049)	-0.039 (0.05)
学歴	0.010 (0.012)	0.010 (0.012)	0.006 (0.012)	0.006 (0.012)	0.010 (0.012)
世帯所得	0.0001 (0.000)	0.0001 (0.000)	0.0001 (0.000)	0.0001 (0.000)	0.0001 (0.000)
公務員	-0.026 (0.125)	-0.018 (0.126)	-0.047 (0.126)	-0.041 (0.127)	-0.027 (0.127)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった		0.083 * (0.045)		0.054 (0.045)	0.053 (0.045)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んできた			0.075 *** (0.023)	0.074 *** (0.023)	0.063 *** (0.023)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			0.080 *** (0.024)	0.078 *** (0.024)	0.077 *** (0.024)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			0.043 * (0.025)	0.042 * (0.025)	0.040 (0.025)
焼け跡世代					-0.134 (0.301)
団塊の世代					-0.265 (0.280)
しらけ世代					-0.348 * (0.211)
バブル世代					-0.378 ** (0.162)
氷河期世代					-0.156 (0.110)
ゆとり世代					0.146 (0.117)
定数項	1.467 *** (0.204)	0.556 *** (0.183)	0.925 *** (0.271)	0.925 *** (0.271)	0.704 ** (0.345)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345
F 値	2.780 **	2.780 **	5.270 ***	4.910 ***	4.950 ***
修正済み決定係数	0.068	0.080	0.020	0.021	0.031

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) OLS による推定結果。係数値を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

(3) 正の互酬性

正の互酬性について（図表-8）、個人属性では性別ダミーが有意であり、男性と比べて女性のほうが正の互酬性が高い傾向が示された。年齢も有意であり、年齢が高いほど正の互酬性が高い傾向が示された。地藏の存在は正で有意であり、子どもの頃の家庭環境に関する変数を含めた場合や世代をコントロールした場合も、正の互酬性に対して有意な影響が認められる。子どもの頃の家庭環

境は、3つの項目のいずれについても正で有意であり、推定式の特定化によらず、正の互酬性に対して有意な影響が認められる。また、家事および家業の手伝いの経験の係数値が、他の2つの経験と比べて大きい。世代区分では、いずれの世代についても有意ではなかった。

(4) 負の互酬性

負の互酬性について（図表-9）、個人属性では

図表-7 向社会性に関する規範意識の形成要因(他者に対する信頼)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
性別 (男性 =1)	-0.053 (0.039)	-0.056 (0.039)	-0.034 (0.039)	-0.036 (0.039)	-0.037 (0.039)
年齢	0.004 *** (0.001)	0.004 *** (0.001)	0.005 *** (0.002)	0.005 *** (0.002)	0.003 (0.006)
婚姻 (既婚 =1)	0.067 (0.042)	0.066 (0.042)	0.074 * (0.042)	0.073 * (0.042)	0.087 ** (0.044)
学歴	0.005 (0.010)	0.005 (0.010)	-0.002 (0.010)	-0.002 (0.010)	0.000 (0.010)
世帯所得	0.0002 *** (0.000)	0.0002 *** (0.000)	0.0002 *** (0.000)	0.0002 *** (0.000)	0.0002 *** (0.000)
公務員	-0.030 (0.107)	-0.026 (0.107)	-0.039 (0.106)	-0.037 (0.107)	-0.041 (0.107)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった		0.038 (0.038)		0.022 (0.038)	0.023 (0.038)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んでもくれた			0.086 *** (0.020)	0.085 *** (0.020)	0.086 *** (0.020)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			-0.018 (0.022)	-0.019 (0.022)	-0.019 (0.022)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			0.060 *** (0.022)	0.059 *** (0.022)	0.057 *** (0.022)
焼け跡世代					0.020 (0.249)
団塊の世代					0.048 (0.230)
しらけ世代					-0.001 (0.177)
バブル世代					0.024 (0.136)
氷河期世代					-0.092 (0.099)
ゆとり世代					-0.007 (0.112)
定数項	2.680 *** (0.157)	2.665 *** (0.158)	2.243 *** (0.204)	2.242 *** (0.204)	2.327 *** (0.265)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345
F 値	5.900 ***	5.210 ***	6.870 ***	6.230 ***	4.240 ***
修正済み決定係数	0.016	0.016	0.029	0.029	0.031

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) OLS による推定結果。係数値を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

性別ダミーが有意であり、女性と比べて男性のほうが負の互酬性が高い傾向が示された。年齢も有意であり、年齢が低いほど負の互酬性が高い傾向が示された。ただし、世代をコントロールした場合では有意ではなくなっている。性別と年齢については、正の互酬性の回帰式での係数の符号と逆である。世帯所得は正で有意であり、世帯所得が高いほど負の互酬性が高い傾向が示されたが、係数値は非常に小さい。世帯所得については、推

定式の特特定化によらず、負の互酬性に対して有意な影響が認められる。地藏の存在については、負の互酬性に対して与える有意な影響は認められない。子どもの頃の家庭環境は、家族そろって夕食を食べた経験が負で有意であり、推定式の特特定化によらず、負の互酬性に対して有意な影響が認められる。世代区分では、氷河期世代が正で有意であり、ポスト氷河期世代と比べて、負の互酬性が高い傾向が示された。

図表-8 向社会性に関する規範意識の形成要因(正の互酬性)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
性別 (男性=1)	-0.107 *** (0.027)	-0.114 *** (0.027)	-0.078 *** (0.027)	-0.085 *** (0.027)	-0.084 *** (0.027)
年齢	0.005 *** (0.001)	0.005 *** (0.001)	0.006 *** (0.001)	0.005 *** (0.001)	0.007 * (0.004)
婚姻 (既婚=1)	-0.025 (0.029)	-0.028 (0.029)	-0.021 (0.029)	-0.023 (0.029)	-0.036 (0.029)
学歴	0.007 (0.007)	0.007 (0.007)	0.006 (0.007)	0.006 (0.007)	0.004 (0.007)
世帯所得	0.00006 (0.000)	0.0001 (0.000)	0.00004 (0.000)	0.00004 (0.000)	0.00004 (0.000)
公務員	0.003 (0.069)	0.013 (0.069)	-0.012 (0.067)	-0.003 (0.068)	-0.009 (0.068)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった		0.110 *** (0.026)		0.088 *** (0.026)	0.089 *** (0.026)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んでくれた			0.039 *** (0.014)	0.036 *** (0.014)	0.039 *** (0.014)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			0.076 *** (0.015)	0.072 *** (0.015)	0.072 *** (0.015)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			0.037 ** (0.016)	0.035 ** (0.016)	0.037 ** (0.016)
焼け跡世代					-0.088 (0.168)
団塊の世代					-0.065 (0.156)
しらけ世代					0.019 (0.120)
バブル世代					0.002 (0.092)
氷河期世代					0.031 (0.063)
ゆとり世代					-0.031 (0.074)
定数項	3.515 *** (0.107)	3.472 *** (0.107)	2.924 *** (0.133)	2.922 *** (0.132)	2.890 *** (0.173)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345
F 値	8.020 ***	9.460 ***	11.200 ***	11.440 ***	7.510 ***
修正済み決定係数	0.022	0.029	0.044	0.049	0.052

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) OLS による推定結果。係数値を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

6. 向社会性に関する規範意識が 利他的行動に与える影響

本節では、向社会的な規範意識が実際の社会行動に与える影響について、利他的行動を被説明変数として、回帰分析を行う。

$$\text{prosocial}_i = \lambda_i + \omega X_i + \eta \text{Architecture}_i + \rho \text{Child}_i + \xi \text{norm}_i + \pi \text{Generation}_i + r_i + v_i \quad (2)$$

prosocial_i は利他的行動（献血、ボランティア活動）である。その他の変数は、回帰式（1）と同様の定義である。 r_i は定数項、 v_i は誤差項である。利他的行動に関する変数が二値変数であり、プロビット・モデルを用いて推定した。

(1) 献血行動

推定の結果、献血行動について（図表-10）、個人属性のうち、性別ダミー、年齢、婚姻ダミー、

図表-9 向社会性に関する規範意識の形成要因(負の互酬性)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
性別 (男性 =1)	0.273 *** (0.038)	0.274 *** (0.038)	0.263 *** (0.038)	0.264 *** (0.039)	0.261 *** (0.038)
年齢	-0.005 *** (0.001)	-0.005 *** (0.001)	-0.005 *** (0.001)	-0.005 *** (0.001)	0.001 (0.006)
婚姻 (既婚 =1)	-0.055 (0.041)	-0.055 (0.041)	-0.058 (0.041)	-0.058 (0.041)	-0.079 * (0.042)
学歴	0.005 (0.009)	0.005 (0.009)	0.005 (0.009)	0.005 (0.009)	0.004 (0.009)
世帯所得	0.0001 ** (0.000)	0.000 (0.000)	0.0001 ** (0.000)	0.0001 ** (0.000)	0.0001 *** (0.000)
公務員	0.034 (0.105)	0.033 (0.105)	0.037 (0.104)	0.036 (0.104)	0.061 (0.105)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった		-0.018 (0.037)		-0.011 (0.037)	-0.012 (0.037)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んできた			-0.006 (0.020)	-0.006 (0.020)	-0.009 (0.020)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			-0.011 (0.021)	-0.010 (0.022)	-0.010 (0.021)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			-0.052 ** (0.022)	-0.052 ** (0.022)	-0.048 ** (0.022)
焼け跡世代					-0.053 (0.244)
団塊の世代					-0.050 (0.226)
しらけ世代					-0.081 (0.175)
バブル世代					0.064 (0.134)
氷河期世代					0.201 ** (0.091)
ゆとり世代					0.099 (0.097)
定数項	2.705 *** (0.152)	2.712 *** (0.152)	2.991 *** (0.200)	2.992 *** (0.200)	2.692 *** (0.257)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345
F 値	15.460 ***	13.290 ***	11.460 ***	10.330 ***	7.690 ***
修正済み決定係数	0.036	0.036	0.039	0.039	0.047

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) OLS による推定結果。係数値を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

公務員ダミー、健康状態について正で有意である。婚姻ダミーを除いて回帰式の定式化によらず、献血行動に対して有意な影響が認められる。他の職種と比べて公務員は献血経験のある確率が平均値周りで10%程度高い。公務員であることは、規範意識に対しては説明力を持たなかったが、献血行動には有意な影響がみられた。ただし、公務員は全体の3.4%であり、結果の解釈には注意が必要で

ある。地藏の存在は正で有意であり、回帰式の定式化によらず、献血行動に対して有意な影響が認められる。子どもの頃の家庭環境については、いずれの回帰式についても、献血行動に対する有意な影響はみられない。規範については、利他性と正の互酬性が有意である。利他性や正の互酬性が高い人は低い人に比べて、献血経験のある確率を押し上げる。世代区分では、しらけ世代、バブル

図表-10 向社会的規範意識が献血行動に与える影響

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
性別（男性=1）	0.106 *** (0.021)	0.101 *** (0.021)	0.113 *** (0.021)	0.106 *** (0.021)	0.107 *** (0.022)	0.106 *** (0.022)
年齢	0.011 *** (0.001)	0.011 *** (0.001)	0.011 *** (0.001)	0.010 *** (0.001)	0.010 *** (0.001)	0.006 * (0.003)
婚姻（既婚=1）	0.039 * (0.023)	0.037 * (0.023)	0.040 * (0.022)	0.038 * (0.023)	0.041 * (0.023)	0.030 (0.024)
学歴	0.004 (0.005)	0.004 (0.005)	0.005 (0.005)	0.005 (0.005)	0.004 (0.005)	0.003 (0.005)
世帯所得	-0.000006 (0.000)	-0.000005 (0.000)	-0.000009 (0.000)	-0.000006 (0.000)	-0.000014 (0.000)	-0.000027 (0.000)
公務員	0.099 * (0.051)	0.108 ** (0.050)	0.097 * (0.051)	0.106 ** (0.050)	0.106 ** (0.050)	0.109 ** (0.051)
健康状態	0.024 ** (0.011)	0.023 ** (0.011)	0.022 ** (0.011)	0.022 * (0.011)	0.019 * (0.011)	0.021 * (0.012)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地藏様があった		0.095 *** (0.021)		0.092 *** (0.021)	0.087 *** (0.021)	0.088 *** (0.021)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んできた			0.000 (0.011)	-0.003 (0.011)	-0.008 (0.011)	-0.004 (0.011)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			0.019 * (0.011)	0.015 (0.011)	0.010 (0.012)	0.012 (0.012)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			0.017 (0.012)	0.015 (0.012)	0.013 (0.012)	0.014 (0.012)
利他性					0.024 ** (0.010)	0.029 *** (0.010)
他者に対する信頼					0.015 (0.012)	0.015 (0.012)
積極的互酬性					0.051 *** (0.017)	0.049 *** (0.017)
消極的互酬性					0.022 (0.013)	0.023 (0.014)
焼け跡世代						0.117 (0.122)
団塊の世代						0.176 (0.101)
しらけ世代						0.165 * (0.089)
バブル世代						0.198 *** (0.057)
氷河期世代						0.081 * (0.048)
ゆとり世代						-0.071 (0.056)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345	2345
Wald 検定	241.02 ***	259.70 ***	243.63 ***	262.06 ***	273.97 ***	305.32 ***
対数尤度	-1432.834	-1422.209	-1430.1925	-1420.400	-1409.270	-1397.321
擬似決定係数	0.082	0.089	0.084	0.090	0.097	0.105

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) プロビット・モデルによる推定結果。限界効果を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

図表-11 向社会的規範意識がボランティア活動に与える影響

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
性別（男性 =1）	0.000 (0.013)	-0.001 (0.013)	0.006 (0.013)	0.005 (0.013)	0.007 (0.013)	0.007 (0.013)
年齢	0.004 *** (0.000)	0.003 *** (0.000)	0.004 *** (0.000)	0.004 *** (0.000)	0.003 *** (0.000)	0.008 *** (0.002)
婚姻（既婚 =1）	0.012 (0.014)	0.011 (0.014)	0.012 (0.014)	0.012 (0.014)	0.012 (0.013)	0.017 (0.013)
学歴	0.0009 (0.003)	0.0010 (0.003)	0.0001 (0.003)	0.0001 (0.003)	0.0004 (0.003)	0.0010 (0.003)
世帯所得	0.0000044 (0.000)	0.0000042 (0.000)	-0.0000008 (0.000)	-0.0000008 (0.000)	-0.0000043 (0.000)	-0.0000003 (0.000)
公務員	0.025 (0.039)	0.026 (0.040)	0.018 (0.038)	0.019 (0.038)	0.020 (0.038)	0.021 (0.037)
健康状態	0.029 *** (0.007)	0.028 *** (0.007)	0.027 *** (0.007)	0.027 *** (0.007)	0.022 *** (0.007)	0.022 *** (0.006)
子どもの頃、近所や登下校の道端にお地蔵様があった		0.015 (0.013)		0.010 (0.013)	0.009 (0.012)	0.009 (0.012)
小学校入学前、家族の誰かが本を読んできた			0.016 *** (0.006)	0.016 ** (0.006)	0.012 * (0.006)	0.011 * (0.006)
小中学生の頃、家事および家業の手伝いをした			0.017 ** (0.007)	0.016 ** (0.007)	0.015 ** (0.007)	0.015 ** (0.007)
小中学生の頃、夕飯は家族そろって食べていた			-0.003 (0.007)	-0.003 (0.007)	-0.004 (0.007)	-0.004 (0.007)
利他性					0.028 *** (0.005)	0.027 *** (0.005)
他者に対する信頼					0.025 *** (0.007)	0.025 *** (0.007)
積極的互酬性					-0.013 (0.010)	-0.012 (0.010)
消極的互酬性					-0.005 (0.007)	-0.005 (0.007)
焼け跡世代						-0.094 ** (0.022)
団塊の世代						-0.105 *** (0.015)
しらけ世代						-0.114 ** (0.041)
バブル世代						-0.083 *** (0.020)
氷河期世代						-0.046 (0.028)
ゆとり世代						0.082 * (0.051)
観測値	2345	2345	2345	2345	2345	2345
Wald 検定	70.44 ***	70.50 ***	82.94 ***	82.79 ***	126.57 ***	143.41 ***
対数尤度	-791.602	-790.915	-784.063	-783.741	-759.937	-749.82404
擬似決定係数	0.050	0.051	0.059	0.060	0.088	0.100

注：1) * p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01

2) プロビット・モデルによる推定結果。限界効果を表示。カッコ内は頑健標準誤差

3) 世代区分について、ポスト氷河期世代（1983～86年）をレファレンス・グループとした

4) その他の説明変数として、15歳時点の居住都道府県を調整した

世代、氷河期世代が有意であり、これらの世代はポスト氷河期世代と比べて、献血経験のある確率を押し上げる。

(2) ボランティア活動

ボランティア活動について（図表-11）、個人属性のうち、年齢と健康状態について正で有意であり、回帰式の定式化によらず、ボランティア活動に対して有意な影響が認められる。地蔵の存在はボランティア活動に対して有意な影響が認められなかった。子どもの頃の生活環境では、家族が本を読んでくれた経験と家事および家業の手伝いが正で有意である。どちらの経験も回帰式の定式化によらず、ボランティア活動に対して有意な影響が認められる。規範では、利他性や他者に対する信頼が正で有意であり、利他性や他者に対する信頼が高い人は低い人に比べて、ボランティア活動への参加確率を押し上げる。世代区分では、焼け跡世代、団塊の世代、しらけ世代、バブル世代ではポスト氷河期世代と比べて、ボランティア活動への参加確率を押し下げる。一方、ゆとり世代では正で有意であり、ポスト氷河期世代と比べてボランティア活動への参加確率を押し上げる。

7. 結語

本稿では、社会規範のなかで向社会性に関する規範意識に着目し、その形成と影響について分析した。分析の結果、規範を内在化させる装置としての地蔵や子供の頃の家庭環境は、向社会性に関する規範意識の形成に影響を与えることがわかった。ただし、装置によって規範に与える影響は異なる。正の互酬性の形成では、回帰式の定式化によらず、いずれの変数も有意に影響を与えている。子どもの頃の家庭や学校、さらにはより広い地域環境の中で、役割分担やコミュニケーションを経験し、アーキテクチャの存在による意識づけをすることによって、規律や秩序、道徳的な価値観を身につけていくと考えられる。

向社会的な規範意識は、将来の不測の事態に備えて、経済的・社会的な支援を受けるためのリス

クに対する保険として機能すると考えられる。平時においても、自助・互助・共助・公助の役割分野が議論されているなかで、当事者意識を持った社会生活行動や互恵的協調的な資源配分などの積極的な影響が期待される。昨今の道德教育や若年者のソーシャル・スキルの習得や発揮などの社会的課題に対しても、若年世代や将来世代における向社会的な規範意識の社会効果が期待されるのではないか。規範の醸成の場や機会としての子どもの頃の環境や経験について、地域コミュニティや教育現場等における働きかけが重要である。

世代は時代精神の特徴やその時代における具体的な経験内容の特性などを反映しており、規範意識にも世代ごとの違いがみられるのではないかと予想した。分析の結果、（少なくとも）向社会的な規範に対しては、世代効果は限定的である様子がうかがえる。一方で、利他的行動については世代効果が見られたが、複数世代にわたって行動経験に対して与える影響が認められた。消費志向や自己実現、経済現象に対する関心や非経済的価値に対する評価などが異なる世代間で同様の傾向が見られたことについては、今後のさらなる検証が必要である。

本稿では、向社会的な規範の形成とその影響について分析したが、政策処方として具体的にどのように規範を醸成し、社会生活における行動参加あるいは行動抑制を実現するのかについて、実践的な課題が残されている。また、規範に対する制度的な働きかけにおけるダークサイドの可能性についても検証する必要がある、これらは今後の課題としたい。

文献

- 大島建彦, 1992, 『民間の地蔵信仰』 北辰堂。
 久米功一, 2014, 「労働に関する規範意識の形成とその影響」『季刊家計経済研究』 102: 44-56。
 厚生労働省, 2013, 「東日本大震災関連情報」厚生労働省ホームページ（2014年1月30日取得, http://www.mhlw.go.jp/shinsai_jouhou/gienkin.html）。
 読売新聞, 2011, 「献血「熱」冷める？……震災直後は希望者殺到（2011年12月15日付）」YOMIURI ONLINE（2014年1月30日取得, <http://www.yomiuri.co.jp/>）

- national/news/20111214-OYT1T00988.htm).
- 読売新聞, 2007, 「公共マナー (2007年8月31日付)」YOMIURI ONLINE (2014年1月30日取得, <http://www.yomiuri.co.jp/feature/f6100/koumoku/20070831.htm>).
- 渡浩一, 2011, 『お地蔵さんの世界——救いの説話・歴史・民俗』慶友社.
- Berkowitz, Leonard and Louise R. Daniels, 1964, "Affecting the Salience on the Social Responsibility Norm: Effect of Past Help on the Response to Dependency Relationship," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68 (3) : 275-281.
- Darley, John M. and Bibb Latane, 1970, "Norms and Normative Behavior: Field Studies of Social Interdependence," J. Macauley and Leonard Berkowitz eds., *Altruism and Helping Behavior*, New York: Academic Press, 83-102.
- Dohmen, Thomas, Armin Falk, David Huffman, and Uwe Sunde, 2009, "Homo Reciprocans: Survey Evidence on Behavioural Outcomes," *Economic Journal*, 119 (536) : 592-612.
- Eisenberg, Nancy, 1992, *The Caring Child*, Cambridge: Harvard University Press.
- Evans, Roy and Eamonn Ferguson, 2014, "Defining and Measuring Blood Donor Altruism: A Theoretical Approach from Biology, Economics and Psychology," *Vox sanguinis*, 106 (2) : 118-126.
- Gouldner, Alvin W., 1960, "The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement," *American Sociological Review*, 25 (2) : 161-178.
- Hill, Ruth V., Eduardo Maruyama, and Angelino Viceisza, 2012, "Breaking the Norm: An Empirical Investigation into the Unraveling of Good Behavior," *Journal of Development Economics*, 99 (1) : 150-162.
- Krupka, Erin and Roberto A. Weber, 2009, "The Focusing and Informational Effects of Norms on Pro-social Behavior," *Journal of Economic Psychology*, 30 (3) : 307-3320.
- Leeds, Ruth, 1963, "Altruism and Norms of Giving," *Merrill Palmer Quarterly*, 9 (3) : 229-240.
- Mills, Rosemary S. L. and Joan E. Grusec, 1989, "Cognitive, Affective, Behavioral Consequences of Praising Altruism," *Merrill Palmer Quarterly*, 35: 299-326.
- Schwartz, Shalom H. and Judith A. Howard, 1981, "A Normative Decision-Making Model of Altruism," Philippe J. Rushton and Richard M. Sorrentino eds., *Altruism and Helping Behavior*, Hillsdale: Lawrence Erlbaum, 189-211.
- Schwartz, Shalom H. and Judith A. Howard, 1982, "Helping and Cooperation: A Self-Based Motivational Model," Valerian J. Derlega ed., *Cooperation and Helping Behavior: Theories and Research*, New York: Academic Press, 327-353.
- Schwartz, Shalom H. and Judith A. Howard, 1984, "Internalized Values as Motivators of Altruism," Ervin Staub, Daniel Bar-Tal, Jerry Karylowski, and Jerome Reykowski eds., *Development and Maintenance of Prosocial Behavior*, New York: Plenum Press, 229-255.
- Wildman, John and Bruce Hollingsworth, 2009, "Blood Donation and the Nature of Altruism," *Journal of Health Economics*, 28 (2) : 492-503.

おくやま・なおこ 神戸大学大学院経済学研究科
准教授。主な論文に「Public Private Partnership
between Local Governments and Nonprofits in
Japan.」(共著, *International Journal of Voluntary and
Nonprofit Organizations*, 21 (2))。公共経済学、行動
経済学、応用計量経済学専攻。
(okuyama@econ.kobe-u.ac.jp)